厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患政策研究事業）
難治性炎症性腸管障害に関する調査研究
総括／分担研究報告書（令和４年度）

IBD 患者へ向けた適正な食事療法の提案

研究分担者　長堀　正和　東京医科歯科大学病院　臨床試験管理センター　准教授

研究要旨：食事療法の提案に繋がる研究計画において、患者やその家族の視点を取り入れるため、参加者メンバーの募集を行い、年度中３回のミーティング(Web)にて議論を行なった。患者及び家族が研究計画に参画するための課題も明らかとなり、今後、具体的な研究計画の策定を行なっていきたい。

共同研究者
安藤 朗（滋賀医科大学消化器内科）
藤谷幹浩（旭川医科大学内科学講座消化器血液腫瘍制御内科学分野）
竹内 健（辻仲病院柏の葉消化器内科）
穂苅量太（防衛医科大学校内科）
渡邉知佳子（国際医療福祉大学三田病院消化器内科）
馬場重樹（滋賀医科大学消化器内科）
長沼 誠（関西医科大学消化器内科）
江﨑幹宏（佐賀大学医学部消化器内科）
加藤 順（千葉大学大学院医学研究院消化器内科）
東大二郎（福岡大学筑紫病院外科）
石毛崇（群馬大学小児科学）
南部 隆亮（埼玉小児医療センター消化器肝臓科）
萩原 真一郎（大阪母子医療センター消化器・内分泌科）
平岡佐規子（岡山大学病院消化器内科）
梁井俊一（岩手医科大学消化器内科消化管分野）
山崎大（京都大学地域医療システム学講座）
日比紀文（北里大学北里研究所病院）

A. 研究目的

IBD 患者の食事療法に関する科学的エビデンスは極めて乏しく、適切なガイダンスについての患者のニーズは大きい。その中で、QOL の改善等に繋がりうる研究を行うため、計画の段階から、患者や家族の視点を取り入れた臨床研究を計画する

B. 研究方法

2022 年 7 月 30 日 14 時より約 1 時間のミーティング（2022 年度第 1 回）を行なった（医師 4 名を含む 11 名が参加）。事前に共有された約 20 分程度の講義ビデオ（「臨床研究の始め方」）を当日試聴していただき、質問を受けた。

医師 3 名を含む 11 名が参加した 9 月 3 日のミーティング（2022 年度第 2 回）では、再度、本プロジェクトに関するイントロダクションを行い、後半では、用意したシナリオのうち、参加者が選択したシナリオを提示して、２グループに分かれて、前回学習した PECO を作成していただいた（以下例）。

グループ用シナリオ（IBD）

IBDには主に潰瘍性大腸炎とクローン病があります。
IBDは腸に関わる病気のため、食事を重視する患者さんが多いです。
IBDが悪くなるのを予防するために、特定の食事（辛い物、脂っこい物、肉、生魚など）や飲み物（アルコール、コーヒー、炭酸飲料など）を避けている人もいるようです。しかし、どの食事で病状の悪化を予防できるのかは、よくわかっていません。

IBD患者が油や刺激物を多く摂取すると悪化するか？

RQ：	（予測/効果や害）
P (誰に)	IBD患者（病院、患者会でリクルート）幅広い患者さん
E (ある要因があると)	油、刺激物の多い食事を摂る。摂取量（脂肪30g/1日以上など→もしくは個人の経験：食事の内容）
C (ない場合と比較して)	油、刺激物を控える。（脂肪30g/1日以下など）
O (どうなる)	症状の悪化（翌日、数週間）血液検査（CRP)の悪化

9

医師 3 名を含む 6 名が参加した 12 月 3 日のミーティング（2022 年度第 3 回）では、クローン病とその食事に関する 30 分弱のビデオ講義を試聴していただき、参加者からは感謝の言葉をいただいた。

（倫理面への配慮）
患者及び家族には、個々の病状に関する情報を共有することは目的ではないことを伝えて参加していただいた。

C. 研究結果

今年度、患者に試聴していただいたビデオは“IBD-PI program”としてアーカイブし、今後の新たな参加者に対しても活用可能と思われた。

IBD-PI program（案）

テーマ	内容	担当
PPIとは？	研究目的を患者が決める意義	山崎
炎症性腸疾患の基礎知識（UC前半）	UCの基礎知識	渡辺
炎症性腸疾患の基礎知識（UC後半）	UCの基礎知識	渡辺
炎症性腸疾患の基礎知識（CD）	CDの基礎知識	渡辺
臨床研究の始め方	研究計画に必要な知識	山崎
臨床研究のまとめ方	研究計画の実際と解析法	山崎
研究倫理と倫理審査委員会		長堀
臨床研究のデザインとそのルール		長堀
PPIの事例紹介		長堀
医学論文の構造	医学論文の読み方（ジャーナルクラブ）	
栄養学総論	炎症性腸疾患における栄養（主に病態）	栄養士（斎藤）
リクエスト（患者から）		
リクエスト（患者から）		

D. 考察

研究計画への参画には、医師や栄養士から得た知識や、ネット等、あるいは、自らの経験等から得た知識に対して、批判的に考察する能力（“Critical thinking”）が必要と思われるが、今年度に作成した教育プログラム（IBD-PI program）に参加してもらいながら、実際の研究計画に参加してもらうことで、これらを学んでいただくことが必要と思われた。

E. 結論

本年度は、参加患者及び家族との本プロジェクトの目的を共有することに費やしたが、今後、参加者の意見を取り入れながら、具体的な研究計画作成につなげたい。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況
（予定を含む）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし